

清水信宏

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士過程1年

テーマ

<荻窪駅北口をめぐる「都市計画」と「まちづくり」の評価、そこから見えてくること>

1. 問題意識と問題提起
2. 焼き鳥の匂いと駅前再開発
3. 教会通りとまちづくり
4. 「都市計画」と「まちづくり」の握手

1. 問題意識と問題提起

本レポートは、荻窪駅北口を対象地域としながら、そこで行なわれてきた「都市計画」や「まちづくり」について評価を加えていくものである。

まずここで言う「都市計画」と「まちづくり」という概念を定義づけておきたい。まず「都市計画」に関しては、「どのような空間環境を市民・企業・公共団体の協働を通じてつくるかについて集団的意志を表明し、その意志を諸実現手段（規制・誘導・事業等）を通じて、実現しようとする公的活動の全体(大方潤一郎「都市を構想する」)」とここでは定義したい。また、「まちづくり」に関しては「地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、「生活の質の向上」を実現するための一連の持続的な活動（佐藤滋）」を採用するものとする。即ち「都市計画」は「目標を設定してそれを実現する」という一連の流れの中でアウトプットを出すことを重視するのに対して、「まちづくり」とは「漸進的」という言葉に代表されるように、プロセスを重視する活動であると言ってしまって、ここでは差し支えない。

このレポートでは2つの事例を取り上げる。1つは荻窪駅北口の再開発問題、もう1つは教会通り商店街における地域情報番組作りを通したまちづくりである。これら2つの事例を通して、「都市計画」と「まちづくり」の関わり方について考察をしていきたいと考えている。

2. 焼き鳥の匂いと駅前再開発

かつて荻窪駅の北口を出ると、出た瞬間炭火の匂いがもわっと来るとというのが一つのお決まりの風景であった。その匂いの根源は「鳥もと」という、北口を出てすぐ右の所にある半露店の焼き鳥屋であった。昼間っから酒を呑んでいるオヤジがよくいたものである。いわば吉祥寺でいうところの「いせや」のような存在であった。荻窪に住んでいる私にとっては、この匂いには妙なノスタルジーみたいなものがあって、友達と「まあ酒呑めるようになったらそのうちここで呑もう」などという話をしていたものである。ところが2009年、この店は移転を余儀なくされた。ちなみに同様の理由で、老舗の中華料理屋と果物屋は姿を消した。

なぜこのような問題が起きたかといえば、土地所有の問題と荻窪駅北口東地区における市街地再開発によるものである。第一の土地所有の問題とは即ち、戦後すぐの闇市に端を発するこの地区の問題に端を発する。即ち、闇市に始まるこの地区の土地所有は、その既成事実的な側面と所有権の問題があべこべになっていて難しい問題を露呈しているのである。ここに第2の問題である再開発事業が入っ

てくると本質の所在はなおのこと複雑に展開するように思われる。

この再開発事業に関しては、1994年に出された「荻窪駅北東地区再開発事業に関する基本的な考え方」という資料が杉並区から出されている。そこではこの事業への問題意識として、「荻窪駅前は「杉並区の顔」になるべき空間であるにもかかわらず、荻窪駅北東地区に関しては建物の老朽化や消費者ニーズの変化などから十分な商業活動が発揮できていない状況になっている」と語られている。



しかし荻窪駅北口は、本当に「杉並区の顔」となりえていなかったのであろうかという点に疑問が行く。インターネットを調べてみれば少なくとも、「鳥もと」がなくなったことを惜しむ声をよく聞くことができた。即ち、「何か寂しい」という意識を持っている人々が多いように思われる。考えるに、嗅覚に訴えかける「街の顔」というのもなかなか味があるのではないか。

確かに土地所有の問題があるため、この事業の評価を善し悪しで判断することはできない。とはいえ、今思えば「街の顔」が一体何であるべきか考える猶予はもう少しあってもよかったのかもしれないし、もしそれができれば法律や行政、住民が一体になった再開発事業を行うことができたのかもしれないと考えてしまう。しかしそれをするには、時代は少々昔すぎたし、地域コミュニティと呼べるほどの関係は既にそこにはもうなかったのかもしれない。人々の心象風景やノスタルジーに訴えかける何かは「都市計画」と共存しうるのか、そんなことを考えさせられる話と言えるのではなかろうか。

3. 教会通りとまちづくり

近ごろ商店街と言えば、「シャッター街」や「スーパーの進出による衰退」などネガティブな話題が蔓延しているように思われる。こうした中で、荻窪駅北口の青梅街道を渡った所に位置する「教会通り商店街」には未だに元気と活気があるように思われる。この商店街は1950年代から続く90店ほどが軒を連ねる商店街で、車一台がやっと通れる狭い道に小さな店が連なっている。

この商店街では、住民ディレクター活動「杉並TV」の協力の基で、地域情報番組を作るという試みがなされている。マスコミがちょっとその地域の取材をして番組を作るというのとはひと味違った、ご近所ならではの視点を盛り込んだ番組制作活動である。例えば、教会通りの祭り「みんなおいでよ！」の様子をライブ配信「Sticam」を使って配信したり、商店街の店主や地元住民が近所の店を訪れてインタビューしCMを作る「二人三脚CM」を作ったり、女性の店主が「あの店の2代目が帰ってきた」など商店街のプチニュースを伝える「教会通りNEWS」を作ったりといったような具合である。こうした地域住民同士でものを作っていかうとする活動によって商店同士の付き合いはより密になって

いくようである。



印象的なのは、素のままの教会通りの温かみこそが、もっとも伝えたい「通りの顔」だという点である。確かに、客観的に見てこの活動それ自体が商店の売りに直接結びつくようには思えない。しかしそこで人々の口から発せられるのは、「外からでは見えない、商店街の“中”まで撮れているかもしれない。ほかの商店ともより深く仲良くなれた」「商店同士の付き合いから生まれる温かい雰囲気がお客様にも伝わり、やがて集客につながれば」といったようなものであって、その本質は売り上げにあるわけではなさそうである。むしろここに生きる人々の生き方に繋がるものが垣間見えるような気がして、非常に興味深い。文化や風土をこうした「まちづくり」活動を通して作っていくという姿勢を読み取ることができて、先ほど第2章で触れた「都市の将来」と「文化」の共存問題に1つのヒントを与えているように思われる。

とは言え、「持続性」という観点に立てば全てが順風満帆とは言えないのが現実であろう。「飽きやすい」気質である荻窪の店主たちが飽きたら終わりだろうし、商店街の売上げが軒並み下がってこうした活動ができなくなれば自然消滅してしまうかもしれない。こうした活動は行政の持つ権力と適切な形で結びつくことで、より有効な運営ができるようになるのではないかと考えられる。例えば、災害予防など何らかの理由で行政がこの地区に何らかの処置を施さなければならなくなった時には、こうした活動を通して育まれた住民の密なコミュニティが主体になりながら、行政と有用な議論をすることが可能になるであろう。即ち、行政と結びつくことでジャンプが起きて「自分たちが生きていくこと」と直接的に結びつき、より密なコミュニティとより有効な都市計画が可能になると考えられるということである。

4. 「都市計画」と「まちづくり」の握手

第2章と第3章では、各々の事例についての評価を下してきた。そこから分かってきたのは住民、行政、土地所有者、店の客、外部のNPOなどなど、「都市計画」や「まちづくり」には無数の主体がありうるということである。1つ目の再開発の事例は、都市計画と文化的問題の擦り合わせをしていくことの限界を露呈したように思われる。2つ目のまちづくり事例は、この地域の文化や風土を形づくっていくための素地をどう作ればいいのかの1つのヒントとなる事例であったように思う。

そしてこれらの話から言えることは、「内部のコミュニティをどうつくるか」が重要であるということではなかろうか。ここでいう「内部」に誰が取り込まれるのかはそのコミュニティが何を狙うかによって異なってくるものである。時として客を取り込んだ方がいい場合もあるかもしれない、また外部

の団体とタッグを組んだ方がいいこともあるかもしれない。そうした密な関係を築いていく過程そのものが「まちづくり」の本質なのであろう。こうした行為の延長線上に、より自分が生きていくことと密接に関わる、よりシリアスな問題決めることに会うことがあるかもしれない。そこでは、行政レベルの人々との付き合いが肝心になってくる。「まちづくり」が「都市計画」と握手し始めるということに他ならない。例えば、現代社会において心象風景やノスタルジーとしての都市を構想していくには、こうしたやり方が一番寛容なようにも思われる。

こうした中において、アカデミックな場所にいる人々に何ができるのであろう。例えば考えられるのは、「まちづくり」と「都市計画」を両方含んだ意味での地域の更新がどの方向へ向かえばよいのかを考える時に、ワークショップなどを通して主体となりうる人々のトポフィリアや心象風景、ノスタルジーというものの所在がどこにあるのかをうまく抽出することである。外部の質の異なるNPOやアカデミック、そういう枠組みを飛び越えた所にきっかけがいくつも散りばめられることで、曖昧模糊とした街の諸相の中で、主体の人々が一体何をすればよいのかが分かってくるのかもしれない。曖昧さに案外その本質を持ちうる「まちづくり」と具体的な目標を必要とする傾向にある「都市計画」がうまく握手するには、そうした街の将来をたぐり寄せるような作業が潜在的に必要なように思われる。

<参考文献>

「まちづくり論・講義資料（第2回／第9回）」

「散歩の達人 2000年3月号」, 交通新聞社, 2000

「荻窪駅北東地区再開発事業に関する基本的な考え方」, 杉並区, 1994

<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1003/26/news053.html> (access: 2010/6/28)

<図版出典>

<http://www.flickr.com/photos/fu3r/2949299988/> (access: 2010/6/28)

<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1003/26/news053.html> (access: 2010/6/28)